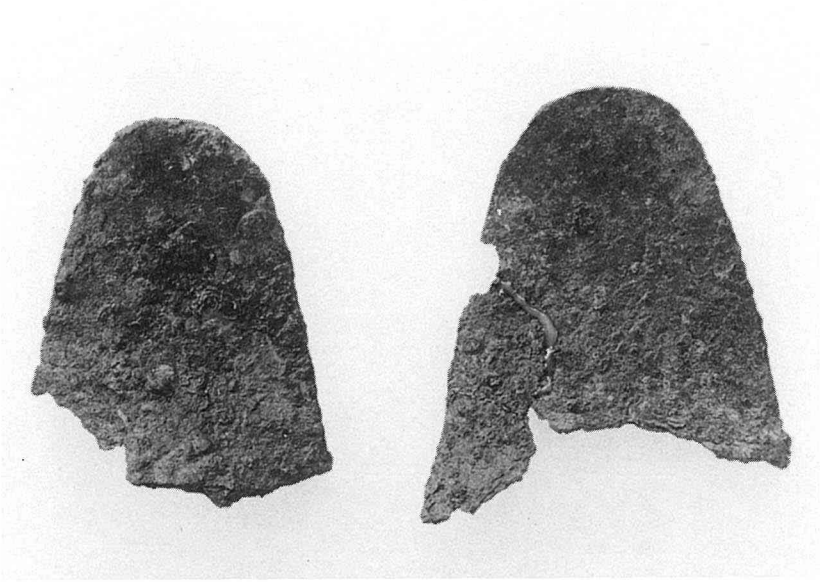
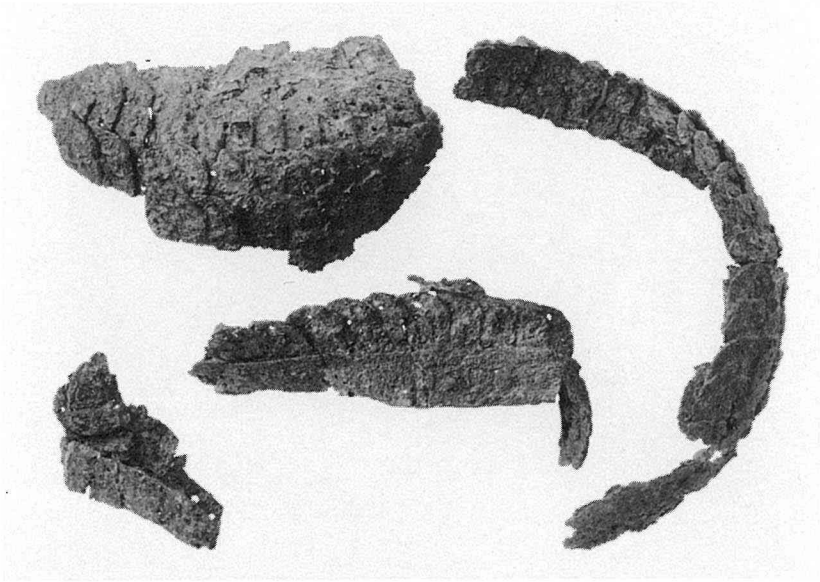
図版一　椿井大塚山古墳の鉄製品

花弁形装飾付鉄製品

図版二　椿井大塚山古墳の鉄製品



花弁形装飾



小札革綴冑

資料紹介

冑か冠か——椿井大塚山古墳の鉄製品

高橋克壽

京都府相楽郡山城町に所在する椿井大塚山古墳は、一九五三年に京都大学文学部考古学研究室によって調査がなされ、三十数面もの中国鏡を出土したことで広く知られる前方後円墳である。後円部に長大な割竹形木棺を納めた竪穴式石室があり、鏡をはじめ、多数の鉄製武器、武具、農工具、漁具、銅鏃などが出土した。[1] これら諸要素から椿井大塚山古墳の築造年代は、古墳時代前期初頭すなわち三世紀後半ないし四世紀初頭に比定される。出土した鏡の主体を占めるのが、三二面以上に及ぶ三角縁神獣鏡であって、小林行雄はその同笵鏡の分有関係の分析から初期大和政権の構造と勢力圏を描き出した。[2] この同笵鏡の配布に関わった重要な人物が、椿井大塚山古墳の被葬者であるとされている。

ここに紹介する鉄製品は、一九五三年の発掘調査によって石室北端西壁寄りのところから検出されたものである。当時すぐに接合が試みられ、半円筒形の本体に三枚の小さい鉄板をはさんで留めてあることまで観察されていたが、接合しえたその半円筒形のかたちに影響されて短甲か肩甲の一部であろうと推測された。その後、一九八六年に出土品が京都大学文学部に正式に移管されたことに伴い再整理がなされたが、この時にも甲の一部と考えられた。[3] 最近になって、野上丈助は共伴の小札革綴冑の存在を考慮し、それと半円筒形の本体との組み合わせを考え、頸甲付小札革綴冑なるものを想定復原した。[4] これははじめて冑との関連を指摘したものとして注目される。

このような経緯をもつものであるが、このほどあらためて甲冑関連資料を調べていたところ、ひとつの花弁形の鉄片が接合したことによりはじめてその全容が判明するに至った。形態と大きさから頭に被るものであることは明らかである。ここにその資料を

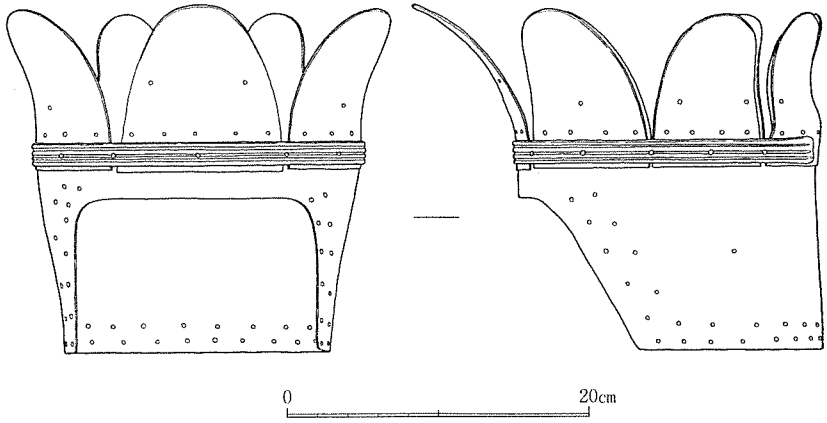


図1　椿井大塚山古墳の花弁形装飾付鉄製品

呈示し、若干の解説と検討を加えたい（図1）。

基本的な構造は、円筒の上端外側に花弁形の装飾を帯金によって留めたものである（図版一）。円筒は幅一三cm余りの一枚の鉄板を曲げて作ってあり、正面から見た場合、上に向かって若干広がっている。下から大きく抉った前面が装着時の顔面部分にあたる。正面からは、その抉りは四角く見えるが、横から見ると斜め六〇度に切り込まれたようになっている。円筒の裾に沿って二列の孔列が認められ、一部それに沿うように布が銹着している。端を包んでいたものと思われる。

花弁形装飾は、正面中央に一枚、そこから後頭部にかけて左右それぞれ対称位置に三枚ずつ、計七枚が取り付けられていたと復原できる。現状では、円筒部と接合しているのは、一枚半だけであるが、このほかに正面中央の一枚とその左右いずれかにつくもう一枚がある（図版二の上）。個々の大きさや形には違いがあり、正面の一枚がもっとも大きく、後方へ行くに従って徐々に小さくなっている。すべての花弁形装飾に円筒に沿って横方向に彎曲したものを外反させる鍛造加工がなされており、後頭部の花弁形装飾はS字形に近い反りをもっている。鉄板にこのような縦横に自由な彎曲をつけることは当時の日本ではまだ相当難しかった技術であったと考えられる。製作地を推定する手がかりになろう。こ

れらの花弁形装飾は下部に水平に穿たれた孔に革紐などを通して、帯金や円筒に固定されたようである。

花弁形装飾をはさみ込んで留める帯金は前方より後方へ回した一本で、表面に三条の平行する凹線がつけられていることが注目される。幅は一・五cm、鋲の類を使用することはしていない。この帯金にもほぼ等間隔に孔があけられており、個々の花弁形装飾の下端中央と円筒とを同時に貫く孔と、花弁形装飾のちょうど中間で円筒のみを同時に貫く孔とが交互に並んでいる。やはり、三種の部品を組み合わすのに利用されたのであろう。

鉄板の厚みは本来一mmに満たない薄いものであったようである。また、表裏各所に目の細かい布が銹着している。製品全体の高さは二三・〇cm、円筒上端の横幅二一・二cm、裾の最大幅一七・四cm。この大きさから頭部に載せるものではなく、内側に布や革などでできた頭頂部を覆うものを伴っていたことが推定できる。

さて、この製品に対しては今のところ、冑と冠の二つの解釈が可能である。まず、冑と見る最大の根拠はそれが側頭部から後頭部を保護するように鉄で作られていることにある。この場合、一つの可能性として、共伴している小札革綴冑（図版二の下）と組み合わせて使用したことが考えられる（この冑はこれまで下端の帯金が裾を水平に全周すると復原されてきたが、そうではなく、前額部に別の帯金を用い、そこが弧状に抉れたようになるものである）。ただし、はじめに小札革綴冑を被ったのちにこの鉄製品を重ねて被るには、円筒前面の抉りの幅一五・八cmというのは狭すぎる感じを与える。小札革綴冑は早くから中国で使用されており、日本最古の例である椿井大塚山古墳の冑も中国からもたらされたものと推定されるが、その中国では同様な鉄製品と組み合わせて使用された例はない。

ところが、このように小札革綴冑との組み合わせを考えなくても、実は革で鉢部を構成し、綴部分にのみ鉄を利用した五世紀代の衝角付冑の例が知られているから、これを単体で冑と見ることも可能なのである。その場合は椿井大塚山古墳には全く異なる二種類の冑が副葬されていたことになる。なお、円筒前面の抉りは、大陸の冑にしばしば見られる伝統と見ることもできる。

これに対して、冠と見る根拠はどうであろうか。それはひとえに七枚の花弁形装飾にあると言える。大きく外側へ反ったこの装飾はそのかたちに大きな意味があったと考えられよう。円筒部分を除外して同様の形態のものを日本で探せば、六世紀以後の人物埴輪の中に見出すことができる。しかし、それらとの年代的開きは大きすぎる。一方、円筒部分については奈良県掖上鑵子塚古墳出土の冠帽形埴輪⑤が前額部の抉りをはじめ、きわめて近い形態を

示している。古墳の年代は五世紀中頃と推定され、いまだ二百年近い隔たりがあるが、材質が何であれ、こうした側頭部から後頭部を覆う被りものが連綿と続いていたことを十分考えさせる。椿井大塚山古墳の製品が鉄で作られていることはむしろ特殊な事情を反映しているのであろう。

鉄の冠自体、東アジア全体を見渡しても類例がない。ただし、『後漢書』「輿服志」下から鉄を部分的に用いて作った通天冠という冠が中国に存在していたことが知られる。[6] 一方、材質を問わなければ、外側へ反り返る花弁形装飾をもつものは、漢・三国・南北朝時代の墓室や鏡の資料の中に見出すことができる。[7] 多くが神仙が被ったものであり、その中でも三枚の花弁形装飾が表されたものがわりあい多い。椿井大塚山古墳の鉄製品は七枚の花弁形装飾をもつが、正面に見えるのはちょうど三枚であり、そうした図像は本来こうしたものを簡略化して写したものかもわからない。

以上、冑と見るか冠と見るかについて手短かに論じてきたが、その両説どちらを取るかについては類例を待って決める以外にない。しかしながら、いずれになるにせよ、このような花弁形装飾をもつ他に類を見ない鉄製品が椿井大塚山古墳から出土していたことの意味は大きいと考えられる。それはその被葬者が初期大和政権中枢に位置した重要人物であったことを、あらためて強く認識させるだけではなく、同笵鏡の配布行為に深く関わった椿井大塚山古墳の被葬者個人の性格を考えさせる資料としても重要と思われるからである。初期大和政権中枢から鏡を配られた各地の首長が、そこに描かれた神仙の被っている冠とその配布者の被りものとを、全く関係ないものとして理解していたとは考えにくいのではなかろうか。

① 梅原末治「椿井大塚山古墳」『京都府文化財調査報告』第二三冊、一九六四年。
② 小林行雄『古墳時代の研究』一九六一年。
③ 京都大学文学部考古学研究室『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』（『京都大学文学部博物館図録』）一九八九年。
④ 野上丈助「日韓古墳出土甲冑の系譜について」『論集武具』一九九一年。
⑤ 岡崎晋明・中村潤子『大和の埴輪』（『橿原考古学研究所附属博物館特別展図録』第二二冊）一九八四年。
⑥ 林巳奈夫『漢代の文物』一九七六年。
⑦ 林巳奈夫『漢代の神神』一九八九年。

（京都大学文学部助手）